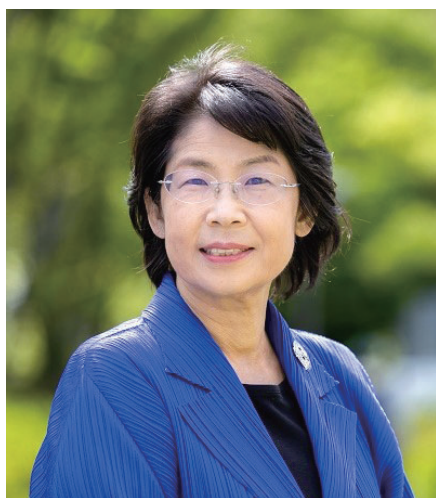


Newsletter for JADR

I. JADR 会長として 2026 年のスタートに寄せて

JADR 会長 林 美加子

(大阪大学大学院歯学研究科 歯科保存学講座)



2026 年も桜の季節を迎えました。

2025 年 1 月より JADR 会長を拝命して以来、江草 宏副会長（東北大学）、松本 卓也財務担当理事（岡山大学）、そして森山 啓司前会長（東京科学大学）をはじめとして、理事、監事および評議員、そして会員の皆様からのご支援をいただきながら、任期の前半を終えることが出来ましたことを、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

2026 年の IADR General Session は 3 月 25 日から 28 日にアメリカ San Deigo で開催されました。世界が不安定な中、対面で交流する価値を共有するとともに、先端的な口腔科学研究によって、より良い世界を実現する志を確認いたしました。

この明るい陽光が振りそぐ San Diego 大会では JADR メンバーの嬉しい受賞もありました。まず、馬場一美先生（昭和医科大学）が Distinguished Scientist Award (Prosthodontics) を、小川祐司先生（新潟大学）が Distinguished Service Award を受賞されました。この生涯忘れられない国際賞のご受賞を心よりお祝い申し上げます。また、JADR から Hatton Travel Award を獲得して本戦に挑まれた AL-KAFEE AHMED HUSSEIN AL KAFEE 先生（九州大学）、張 玲先生（九州大学）、Naruephorn Vinaikosol 先生（東北大学）の 3 名の奮闘を心より讃えたいと

思います。これらの San Diego 大会の様子は、次号の Newsletter にて詳しくご報告いただきます。

前回の Newsletter でご報告しましたとおり、2026 年 IADR General Session は横浜で開催されます。この記念すべき IADR 横浜の実行委員長は江草 宏先生、副委員長は松本 卓也先生に決定しており、2026 年 1 月には第一回実行委員会を開催しました。横浜の地にいかに国内外から多くの参加者にお集まりいただくかについて、プログラムや関連団体との連携など、幅広い意見交換が始まりました。特に、次世代を担う若い世代が多く参画できるよう工夫してまいりたいと思いますので、会員の皆様からも、是非、アイデアをお寄せいただきたくお願いいたします。

2026 年 JADR 年次総会は、11 月 28 日と 29 日に、大阪大学箕面キャンパスにて加藤 隆史理事を実行委員長として開催いたします。基調講演には大阪大学総長の熊ノ郷 淳教授を、特別講演には IADR 会長の Jennifer Gallagher 教授（King's College London）と KADR 会長の Jin Chung 教授（Pusan National University）をお迎えして開催いたします。そこでは、多彩なシンポジウムに加えて、JADR 各賞のコンペティションやポスター発表も予定していますので、多くの皆様を大阪大学の新しいキャンパスにお迎えしたいと思っています。

世界で起こっている果てしない戦いや破壊行為が 1 日も早く終息し、平和で自由な環境で心おきなく研究活動ができるよう願って、筆をおきたく思います。



2026 年 IADR General Session が開催された San Diego Convention Center

Ⅱ. IADR会長の任を終えて

今里 聡

(大阪大学大学院歯学研究科 歯科生体材料学講座)

IADR 会員の皆様におかれましてはご健勝のこととお慶び申し上げます。お陰様で、昨年6月に第101代 IADR President (会長) の任を無事に終えることができました。副会長選出の投票に始まり、これまで JADR の皆様方に多大なるご支援をいただきましたことに心より御礼申し上げます。

私は、2024年3月から1年3か月間会長を務めさせていただきましたが(図1)、その期間を含む IADR 執行部としての4年間の活動は極めて貴重な体験でした。そこで、この場をお借りして、会長としての活動の概要を皆様にご紹介したいと思います。



図1 2024年の会長就任セレモニーにて、Klein 前会長から IADR 会長メダルを引き継ぐ。

1. 会長として迎えたバルセロナ大会

年次大会は IADR として的一大イベントであるため、執行部会議や理事会で入念な事前準備を行います。そして、大会の週になると、火曜日の午後には開かれる評議員会 (Council meeting) を仕切るところから会長の仕事本格スタートします。それ以降、Opening ceremony の進行役 (図2)、各 Region の会議や FDI・WHO との三者会議への出席、Exhibitor のブースを巡っての写真撮影、学会への高額寄附者との面談等々、毎日、朝から夕方まで公式行事に追われます。さらに会期中の水曜と木曜の夕方にはいろいろな Division や各国の大学等が主催する Reception がいくつも重なって開催されるため、それらをハシゴしながら挨拶と交流を行います。木曜の Japan Night でも、冒頭に挨拶させていただいてすぐに他の Reception に移動しなければならず、残念ながら JADR 会員の皆様とゆっくりお話しすることはできませんでした。



図2 バルセロナ大会における Opening ceremony。

社交行事や会議がビッシリ詰まっているため、会長は通常の scientific セッションにはほとんど顔を出すことはできません。ただ、ミシガン大の Kamada Nobuhiko 先生による基調講演 (Distinguished Lecture Series) で座長を務め、最終日にも関わらず多くの聴衆が参集して Q&A の打ち切りに苦勞する程だったことは研究者として心躍るイベントでした。また、President として企画したシンポジウム「In Pursuit of Alternatives to Dental Amalgam: Where We Are」には林 JADR 会長にもご登壇いただき、熱心な討論を座長自らも楽しませていただきました。このような My meeting として開催されたバルセロナ大会は、約4700人の参加者を得、コロナ禍以降では久しぶりに大成功のうちに幕を閉じました。

なお、会長は年次大会ごとに交代し、金曜の夕方に次期会長にバトンを渡す交代セレモニーが開催されます。セレモニーの後には、公式の Reception を開き、続いてその後に30名程度を招待する President Private Reception をホストします。林会長や森山前会長をはじめ、これらのイベントに出席いただいた JADR の先生方から労いの言葉をいただき、胸を撫で下ろした嬉しいひとときでした (図3)。

2. 会務運営

現在、IADR の運営は主に、執行部会議と中樞委員会、ならびに理事会によって司られています。

1) 執行部としての活動

会長は、次期会長、副会長、前会長、財務理事、Fox 事務局長を含めた計6名からなる執行部会議 (Board Officers meeting) をリードし、IADR の活動の基本案を策定します。この会議は、メールはもちろんのこと、オンラインでも頻繁に行わ



図3 バルセロナ大会での President 交代式後の Reception にて。JADR 林会長，森山前会長と。

れますが、米国東部標準時で設定されるので、日本の早朝や夜中からの開始が多く、さすがに眠さとの闘いになります。また、2つの中枢委員会である、学術活動全般を担う Strategy & Planning Committee と財務全般を担う Performance & Audit Committee の会議にもすべて参加します。これらに加えて、学会保有資産の投資を委託しているコンサルティング会社や、学会誌 Journal of Dental Research を発行する SAGE の活動内容を評価するコンサルティング会社とのミーティング等、外からは見えないたくさんの実務に追われます。

2) 理事会の運営

理事会 (Board meeting) は、執行部会議のメンバーに加えて、5つの Region からの代表と Young representative 2 名を含む計 13 名で構成され、5 月と 12 月に米国で、後の 1 回は年次大会の開催地で対面での会議が開かれます。米国での開催地はそのときどきで変わりますが、ここ最近では、ワシントン D.C. の南 10 km に位置する、IADR 本部のあるアレキサンドリアという町で開催されています (図 4)。およそ 2 日間にわたる理事会では、会長が議事の進行すべてを仕切らなければならず (図 5)、メンバーはみな協力的ではあるものの、地域ごとの経済状態の違いによって意見が食い違うこともあったりして、結論の落としどころに苦労することもありました。また、投資関係の議題では慣れない経済用語が飛び交い、米国の株価やインフレ状況の情報なども登場するので理解するのがなかなか大変でした。

将来の年次大会については、理事会での投票で最終候補地が決まり、評議員会で承認するというプロセスで決定するので、理事会での話し合いが肝となります。2029 年の開催に名乗りを挙げた横浜は理事会でも好評で、無事に決まった時は JADR 会員として胸が熱くなりました。2029 年の大会をきっかけに日本の歯科界全体が盛り上がるよう、IADR 元会長として努めていきたいと思っています。



図4 米国アレキサンドリアの IADR 本部前にて。



図5 理事会 (Board meeting) の様子。

3. Division の大会や関連組織の会議への出席

IADR 会長は当然、さまざまな Division が開催する大会に招待されます。私の場合は副会長に就任した時点からいくつかの Division から招待いただき、会長在任中には British, Australia/New Zealand, American division 等の大会に出席して会長としての挨拶や講演を行いました (図 6)。また、IADR は近年 FDI や WHO とともに緊密に連携しており、イスタンブールで開催された FDI 大会や、バンコクで開催された第 1 回 WHO Global Oral Health Meeting にも出席しました (図 7)。



図6 英国部会 (BSODR) での会長講演。



図7 タイ・バンコクで開催された第1回 WHO Global Oral Health Meeting にて。

4. 任を終えて思うこと

英語を母国語としない日本人が IADR という大きな国際学会でリーダーシップを発揮するのは容易なことではなく、過去に会長をお務めになった作田 守先生、黒田敬之先生、安孫子直光先生らのご指導を仰ぎながら、何とか会長職を全うすることができました。拙い会長ではありましたが、私の姿を見て、「自分もがんばれば IADR の会長になれるんだ」と若い歯学研究者の方々が IADR 会長というものを身近に感じ、将来 IADR を率いていく夢をもっといただければ、私にとってはそれが何よりも喜ばしいことです。若き JADR 会員の皆様の奮闘に期待しております!!

III. 第6回 IADR APR 学術大会 (第73回 JADR 総会・学術大会各賞受賞者報告)

1. 2025 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

安保 沙羅

(東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野)

この度、第73回 JADR 総会・学術大会において、荣誉ある JADR/GC 学術奨励賞を拝受し、大変光栄に存じます。JADR 会長である林美加子先生をはじめ、本賞の選考ならびに学会運営にご尽力くださいました諸先生方に、心より御礼申し上げます。

本賞の対象となった演題は、「Dental Plaque-Derived Extracellular DNA Induces Inflammatory Responses in Periodontal Tissues」であり、歯周ポケットに蓄積したプラーク由来の細胞外 DNA が、歯周組織の炎症を惹起する機序の解明を目的とした研究です。歯周炎は国民の約半数が罹患する極めて頻度の高い疾患であるにもかかわらず、その発症や進行の機序には未だ不明な点が多く、基礎研究に基づく新たな発症メカニズムの解明が求められています。

本研究では、歯周炎患者のプラークから抽出した細菌由来細胞外 DNA が、エンドサイトーシスを介してマクロファージに取り込まれ、TLR9 を活性化することで炎症性サイトカイン産生を亢進し、さらにマウス歯周組織における破骨細胞活性を促進することを明らかにしました。これまで歯周炎の炎症惹起因子としては、特定の歯周病原細菌由来のリポ多糖や酵素が注目されてきましたが、本研究成果は、プラークに含まれる細菌由来細胞外 DNA が、炎症や歯周組織破壊の新たな引き金となり得る可能性を示しています。今後は、本研究成果を基盤として、細胞外 DNA を標的とした新規歯周炎予防法・治療法の確立を目指した研究を発展させていきたいと考えています。

学会期間中は、初めて訪れたインドという地において、研究発表のみならず、現地の文化や人々の力強い生活エネルギーに触れる貴重な経験を得ることができました。街に溢れる生命力や創造性、そして夕食の場で自然と音楽を楽しむ人々の姿は強く印象に残り、研究者として国際的に活動する意義を改めて実感する機会となりました。

本受賞を一つの通過点、そして新たな出発点と捉え、今後も歯周疾患の病態解明とその臨床応用に繋がる研究に真摯に取り組み、国際的に活躍できる研究者を目指して精進してまいります。最後になりますが、本研究の遂行にあたり温かいご指導とご助言を賜りました、東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野の江草宏教授、近藤威先生、ならびに研究室の皆様、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



学会会場での写真 (左) 近藤威講師, 筆者, (右) 江草宏教授

より減少することが明らかとなりました。これに伴い、アルロース群では、培地の pH 低下が抑制されることも示されました。今後は、キシリトールとアルロースの併用なども視野に入れ、より幅広い食品に応用可能な齲蝕予防戦略の構築を目指して研究を進めていきたいと考えています。

本大会は APR との共催であり、私にとっては初めてのインド訪問となりました。会期中は、想像以上に多彩なレパトリーを持つカレーをはじめとするインド料理を堪能することができましたが、さすがに毎日続くと食べ切った感もあり、帰国後、そして本稿を執筆している現在に至るまで、カレーを口にする機会は減った印象があります。しかしながら、古くから多様な文明が交錯してきたインド独特の雰囲気は非常に印象的であり、今後さらなる発展を遂げていくであろう国のエネルギーを強く感じました。機会があれば、ぜひ一度インドを訪れてみていただきたいと思います。

2. 2025 年度学術奨励賞を受賞して

権藤 理夢

(東京科学大学大学院医歯学総合研究科 歯制御学分野)

2025 年 9 月にインド・ニューデリーにて開催された第 73 回 JADR 総会・学術大会 (6th Meeting of the IADR Asia Pacific Region と併催) において、栄誉ある学術奨励賞を受賞する機会を賜り、大変光栄に存じます。また本賞の受賞にあたり、JADR 前会長の林美加子先生、現会長の江草宏先生をはじめ、選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。

発表演題は “Potential Role of Allulose in Modulating Cariogenic Biofilms” であり、本研究では、齲蝕予防効果が期待される新たな代用糖の候補であるアルロースが、ヒト唾液由来バイオフィーム形成に与える影響について検討しました。現在、キシリトールは齲蝕予防効果を有する代用糖として広く応用されていますが、天然由来で安全性が確保されている一方、その強い清涼感のある風味から、幅広い食品への応用が難しいという課題も指摘されています。本研究で用いたアルロースは、天然ではズイナなどの植物にも含まれる希少糖であり、ブドウ糖や果糖と同じ単糖の一つです。カロリーは 0.39 kcal/g と極めて低く、近年では血糖値上昇抑制作用や体脂肪減少効果など、生活習慣病予防への有用性も報告され、注目を集めています。

本研究では、ヒト唾液由来バイオフィーム培養時の栄養源としてスクロースまたはアルロースを用い、アパタイト表面に形成されるバイオフィームの生菌数および菌叢構成について解析を行いました。その結果、アルロース添加によるバイオフィーム中の生菌数および多様性には有意な差を認めませんでした。一方、16S rRNA 遺伝子アンプリコン解析による網羅的細菌叢解析の結果、アルロース群とスクロース群では菌叢構成に差異が認められ、特に乳酸菌群がアルロース添加に



3. 2025 年度 GC 学術奨励賞を受賞して

JUMANA ZAVERI

(大阪大学大学院歯学研究科歯科保存学講座)

Article for JADR Newsletter :

It was an incredible honour for me to receive the JADR/GC Young Investigator Award at the 2025 IADR/APR conference held in New Delhi, India. As a third-year PhD student specialising in oral science, this recognition marked a significant milestone in my academic journey.

At the conference, I had the opportunity to present the research titled “Establishing a robust analytical approach for detecting major and minor elements in dentin remineralisation”, which focused on improving the detection of ions involved in dentin remineralisation following silver diamine fluoride (SDF) treatment, particularly light and trace elements such as fluoride. By employing a low-vacuum

SEM-EDS approach without conductive coating, dentin could be examined in a hydrated, near-physiological state with reduced background noise, enabling clearer visualisation of ionic distributions and early precipitate formation after SDF application. These findings demonstrate that the non-coated approach preserves delicate surface features often obscured by conventional coating methods and offers a robust platform for studying dentin remineralisation, supporting the development of next-generation fluoride-based treatment strategies.

Presenting this research at the IADR meeting was a highly rewarding experience and a valuable opportunity to share my findings with the broader scientific community. I was delighted to engage with esteemed researchers and professionals from around the world, and to receive insightful feedback and suggestions that will help guide and refine my future studies. The meeting served as an excellent platform to exchange ideas and learn from groundbreaking research in dentistry from Japan and abroad, greatly broadening my academic perspective and inspiring me to further develop my research objectives.

Beyond the scientific discussions, it was also a personal honour to introduce my Japanese colleagues to my home country, India. Sharing cultural experiences alongside academic exchange highlighted the importance of international collaboration in fostering both scientific progress and mutual understanding.

Finally, I would like to express my sincere gratitude to my supervisor, Professor Mikako Hayashi of The University of Osaka, and to my mentor, Dr Katsuaki Naito of Northwestern University, as well as all members of the research group, for their kind guidance, encouragement, and continuous support. I am also deeply thankful to all members of the department for their support throughout this work. Receiving this award has further strengthened my motivation to advance my research and to contribute to the continued progress of dental science in the years to come.



Highlights from IADR/APR 2025—presentation, award, and conference moments.

4. 2025 年度 GC 学術奨励賞を受賞して

都留 千晶

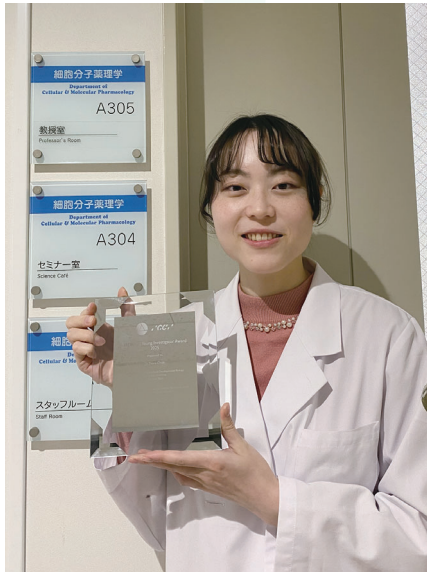
(広島大学 大学院医系科学研究科 (歯) 歯科矯正学講座)

この度、インドのニューデリーで開催されました第73回 JADR 総会・学術大会において「Microglia-specific deactivation reverses allodynia in autism spectrum disorder model mice」の演題にて発表を行い、2025 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞いたしました。このような歴史ある学会において名誉ある賞をいただきましたことを大変光栄に存じます。

私は、自閉スペクトラム症 (ASD) 患者にしばしば見られる、感覚刺激に対する過敏な反応の一つとして「アロディニア」に着目し研究を行っています。歯科治療では、顎顔面・口腔領域に対する処置のため、触覚あるいは痛覚に対する感受性の亢進は ASD 患者が医療受診を困難に感じる要因の一つとなっています。しかしその発症メカニズムは解明されておらず、根本的な治療法も確立されていません。バルプロ酸ナトリウムはてんかんの第一選択薬として広く使用されていますが、妊娠期の服用により出生児の ASD 発症リスクが増大することが知られています。私達の研究グループは、胎生期にバルプロ酸ナトリウムを投与したマウスが社会性行動の減少や認知機能の障害、機械的アロディニアや脊髄におけるミクログリアの形態変化を示すことを明らかにしてきましたが、それらのメカニズムの詳細は不明でした。そこで私は、バルプロ酸ナトリウムが有するヒストン脱アセチル化酵素 (HDAC) 阻害作用と ASD モデルマウスでの脊髄ミクログリアの形態学的異常に着目し、これらと機械的アロディニアとの関連性を明らかにする目的で研究を行いました。

実験の結果、バルプロ酸ナトリウムに限らず、胎生期の特定の時期に HDAC 阻害作用を有する薬物に曝露されることで機械的アロディニアが生じること、またこの時、脊髄において過剰に枝分かれしたハイパーラミファイド型のミクログリアが多数存在することを見いだしました。In vivo 細胞外記録法による解析から、胎生期に HDAC を阻害したマウスの脊髄では、神経細胞の自発発火頻度や von Frey フィラメントによる後肢への圧刺激時の発火頻度が増加しており、中枢性感作が生じていることを明らかにしました。さらに化学遺伝学技術を用いてミクログリアの活動状態を選択的に抑制すると、神経細胞の過剰な興奮状態が抑えられ、アロディニアが改善しました。以上の結果は、胎生期の HDAC 阻害によるミクログリアの活動状態の変化と神経細胞の機能異常、アロディニアの発現との関連を直接示すもので、ASD における痛覚感受性変化の神経科学的基盤の一端を明らかにしました。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導賜りました広島大学大学院医系科学研究科 (歯) 細胞分子薬理学の吾郷由希夫教授をはじめ、多くの先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



5. 2025 年度 JADR/GC 学術奨励賞を受賞して

松岡 大貴

(岡山大学学術研究院医療開発領域小児歯科学分野)

この度、IADR-APR Conference 2025において、演題「*Streptococcus mutans* Cnm involvement in IgA nephropathy onset mechanism」を発表し、2025 年度 JADR/GC 学術奨励賞という名誉ある賞を賜りましたことを大変光栄に思います。JADR 会長である林美加子先生をはじめ、ご尽力いただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

慢性腎臓病 (Chronic kidney disease; CKD) は腎臓に生じる慢性的な炎症性疾患の総称です。CKDのうち、病変部位が糸球体であるものを慢性糸球体腎炎といい、IgA 腎症は、慢性糸球体腎炎の中で最も頻度が高く、糸球体のメサンギウム領域に IgA が過剰に沈着して発症するとされていますが、その原因やメカニズムの詳細は未だ明らかになっていません。これまでに、IgA 腎症患者の口腔内には、コラーゲン結合タンパク (Cnm) を持つ *Streptococcus mutans* が高頻度に検出されることが明らかになっています。Cnm はこれまでに様々な全身疾患の発症に関連していることが報告されています。本研究では、Cnm と IgA との相互作用を解析することで、Cnm が IgA 腎症の発症メカニズムにどのように関与しているかを検討しました。

S. mutans の菌体表層タンパクである Cnm, GTFB, および GbpC の組換えタンパク (rCnm, rGTFB, および rGbpC) を構築し、ヒト免疫グロブリン IgA1, IgA2, および IgG との結合を検討した結果、rCnm は、他の免疫グロブリンと比較して、IgA1 に対する結合能が有意に高く、他の菌体表層タンパクと比較して IgA1 に有意に高い結合を示しました。さらに、IgA 腎症患者の血清 IgA は健常者の血清 IgA と比較して rCnm と強

固に結合することがわかりました。また、ラット頸静脈より rCnm を投与した結果、腎臓糸球体に IgA の沈着と、同領域に Cnm の存在が観察されました。これらの結果から、IgA と Cnm の結合は腎臓糸球体への IgA の沈着を惹起している可能性が示されました。本研究の成果により、これまで明らかとなっていなかった IgA 腎症発症メカニズムにおいて、口腔内細菌である *S. mutans* の保有する Cnm が IgA と結合することで、全身疾患である IgA 腎症の病態の発症に関与している可能性が示唆されました。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、ご指導を賜りました岡山大学学術研究院医歯薬学域小児歯科学分野の仲野道代教授、仲周平准教授をはじめ、御協力いただいた諸先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

IV. JADR/Lotte Award を受賞して

1. 2025 年度 JADR Lotte 学術賞を受賞して

仲 周平

(岡山大学学術研究院医歯薬学域小児歯科学分野)

このたびは、第73回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会において、JADR Lotte 学術賞という大変名誉ある賞を賜り、誠に光栄に存じます。本賞にご選考いただきました選考委員の諸先生方ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

本研究は、齲蝕病原性細菌として知られる *Streptococcus mutans* のうち、菌体表層にコラーゲン結合タンパク Cnm を発現する菌株に着目し、慢性糸球体腎炎の一つである IgA 腎症の発症機構との関連を検討したものです。齲蝕病原性細菌である *S. mutans* が腎疾患の病態形成に関与する可能性を、動物実験モデルを用いて明らかにした点に本研究の意義があると考えております。作製したりコンビナント Cnm タンパクを血中投与したラット実験モデルにおいて、小腸および腎臓での遺伝子発現変化を網羅的に解析した結果、IgA 産生を促進し病態進展に関与するとされる Toll 様受容体 7 および 9 (TLR7, TLR9) をコードする遺伝子の発現上昇が認められ、さらに腎臓糸球体における IgA の沈着が確認されました。これらの知見から、血液中に侵入した Cnm が腸管免疫系を介して IgA 産生を促進し、腎臓への IgA 沈着を誘導することで病態発症に関与する可能性が示唆されました。

本研究に至るまでの過程では、日々ご指導いただいております岡山大学学術研究院医歯薬学域小児歯科学分野の仲野道代教授、医局の諸先生方、ならびに大阪大学大学院歯学研究科在籍時より一貫してご指導を賜っております仲野和彦教授、

腎臓内科の諸先生方との学際的な共同研究が私の大きな支えとなっております。また、本研究は基礎的研究としての意義にとどまらず、将来的な疾患予防や早期診断への応用を見据えて進めております。歯科医学の立場から全身疾患の理解に寄与する重要性を改めて認識するとともに、この場をお借りして、本研究に携わってくださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

今回の受賞は、これまでの研究成果に対する評価であると同時に、今後の研究の発展に向けた励みであると受け止めております。今後は、より大規模なヒト研究への展開や、粘膜免疫および自然免疫機構との関連についての解析をさらに進展させ、口腔細菌が全身疾患に及ぼす影響の全体像を明らかにしていきたいと考えております。また、歯科医学と全身医学をつなぐ研究を今後も継続的に遂行し、次世代の研究者育成にも努めてまいります。

最後に、JADRの理事および評議員の諸先生方、Lotte Awardのご後援にご尽力いただいたLotteの関係者の皆様、ならびに本学術大会の運営に携わられたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

2. 2025年度 JADR Lotte 学術賞を受賞して

新部 邦透

(東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野)

この度、2025年度 IADR-APR 学術大会において、「HDAC3 Controls Dental Mesenchymal Differentiation and Tooth Root Development」と題して発表し、JADR/Lotte 学術賞を受賞いたしました。このような賞を受賞できたのも、これまでご指導いただいた江草教授、米国留学帰国後も共同研究を通してご指導いただいた Mayo Clinic の Westendorf 教授、そして研究グループの皆様のご支援の賜物であり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

私は、幹細胞を用いた歯胚再生研究に従事しています。試験管内で誘導された再生歯胚は最終的にどの程度の大きさや形になるかを事前に予測・制御することは難しく、実際に成長させてみないと分からないという課題があります。歯の形態形成については、例えば咬頭の形成は遺伝的要因に影響を受けることが知られています。しかし、環境的要因など遺伝子の DNA 塩基配列の変化を伴わない遺伝子のオン・オフの切り替え制御についてはあまり分かっていませんでした。

今回、象牙質やセメント質といった硬組織特異的に発現する Osterix 遺伝子が発現した細胞において、エピジェネティクス因子として知られるヒストン脱アセチル化酵素 (HDAC3) の発現が欠失する遺伝子改変マウス (cKO マウス) の歯を解析しました。その結果、歯根が通常より短くなり、根尖孔が早期閉鎖することが明らかになりました。さらに、この cKO

マウスから採取した歯髓細胞では、野生型マウスに比較して石灰化が抑制されました。また、HDAC3 の働きを抑える発現抑制薬 (阻害剤) を用いてセメント芽細胞に処理を行ったところ、細胞の石灰化を人工的に抑制することに成功しました。

これらの成果は、遺伝子を直接操作することなく薬剤などで再生歯胚の歯根の成長をコントロールし、必要以上に長くならないように調整できる可能性を示しており、また歯原性細胞の新たなエピジェネティクス制御性の発見につながる可能性があります。本研究は、歯の再生治療という「夢の補綴歯科治療」の実現に向けて、その一步を大きく前進させる点を評価いただけたのではないかと考えています。

最後になりますが、本受賞に際し、JADR 会長の林美加子先生、本学術賞の選考委員の先生方、本学会運営にあられた皆様、Lotte 株式会社の皆様に厚く御礼申し上げます。



左：江草宏教授 右：筆者

3. 2025年度 JADR Lotte 学術賞を受賞して

前菌 葉月

(大阪大学大学院歯学研究科歯科保存学講座)

この度は、第72回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会において、JADR/Lotte 学術賞という大変名誉ある賞を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。本学術賞選考委員の先生方をはじめ、ご支援を賜りました諸先生方に深く感謝申し上げます。

私はこれまで、口腔バイオフィルムの制御と歯内療法領域における新たな治療法の可能性を探る研究に取り組んでまいりました。抗菌薬等を用いたバイオフィルム抑制法の検討に始まり、要時生成型亜塩素酸水溶液 (MA-T) を応用した口腔ケア法の開発、さらには過硝酸 (peroxynitric acid; PNA) の歯科領域への応用など、臨床応用を目指した基礎的な検討を積み重ねてきました。

今回受賞対象となった研究では、PNA がヒト歯肉縁上プラ

ーク由来の多菌種バイオフィルムに対し高い抗菌効果を示すことを確認しました。従来広く用いられてきた次亜塩素酸ナトリウムは高い殺菌力を有する一方で、細胞毒性や刺激性が課題とされてきました。PNA はこれらとは異なる特性を持ち、より安全に使用できる可能性が示唆されました。ヒト由来の多菌種バイオフィルムを用いた評価系は、より臨床に近い条件で検討できる点に特徴があり、今後も慎重に検証を続けていきたいと考えております。

また、今回のコンペティションが行われたインド・ニューデリーでの滞在は、研究面だけでなく文化的にも大きな刺激となりました。混沌と活気が共存する独特の空気の中で、これまで参加した学会の中でも特に長く感じられるレセプションに臨み、挨拶がいつまでも続くような、日本ではまず経験しない時間の流れを体感しました。こうした文化の違いに触れながら、多様な価値観の中で研究者としての視野を広げる貴重な機会となりました。

今回の受賞は、私にとって大きな励みとなりました。今後も、ともに研究に取り組んでいる先生方と力を合わせながら、小さな積み重ねを大切に、取り組みを続けていきたいと考えております。

最後になりましたが、長年にわたりご指導いただいた林美加子教授、共同研究者の皆様、そして研究グループの皆さんをはじめとする研究室のメンバーの温かいご支援に深く感謝申し上げます。また、JADR の理事・評議員の先生方、Lotte 関係者の皆様、本学術大会の運営にご尽力いただいたすべての皆様に、改めて心より御礼申し上げます。

V. 第74回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内

大会長 加藤 隆史

(大阪大学大学院歯学研究科口腔生理学講座)

会 期：2026年11月28日(土)、29日(日)
会 場：大阪大学外国語学部キャンパス
(〒562-8678 大阪府箕面市船場東3-5-10)

大 会 長：加藤 隆史
(大阪大学大学院歯学研究科口腔生理学講座)

内 容：特別講演、シンポジウム、ランチョンシンポジウム、ポスターセッション、展示、その他

基 調 講 演：熊ノ郷 淳 (大阪大学総長)

特 別 講 演：Jennifer Gallagher, IADR President (President of IADR, King's College of London)
Jin Chung (KADR current President elect, Pusan National University)

このたび「第74回国際歯科研究学会日本部会 (Japanese Division, International Association for Dental, Oral and Craniofacial Research ; JADR) 学術大会」を、2026年11月28日(土)・29日(日)の2日間にわたり、大阪大学箕面キャンパスにて開催する運びとなりました。本大会のテーマは「Exploring New Frontiers in Oral Health Science」とし、歯科医学研究の未来とともに切り拓いていくための、新しい視点と出会いが生まれる場にしたいと考えております。

大阪大学箕面キャンパスは、2021年に新設された教育・研究拠点であり、豊かな自然環境と最先端の設備が調和した非常に魅力的なキャンパスです。この開放的な雰囲気の中で、参加される皆さまが交流を深め、新たな研究の芽が育まれることを願っております。

プログラムにおきましては、大阪大学総長の熊ノ郷淳教授による基調講演をはじめ、国際歯科研究学会 (International Association for Dental, Oral and Craniofacial Research ; IADR) 会長の Jennifer Gallagher 教授、国際歯科研究学会韓国部会 (KADR) 次期会長の Jin Chung 教授による特別講演を予定しております。さらに、JADR と KADR の合同シンポジウムに加え、歯科医学および関連分野の最新トピックスを扱う5つのテーマ別シンポジウムを企画しており、幅広い視点から研究の深化と発展を感じていただける内容となっております。

また、若手研究者の皆さまの挑戦を後押しするプログラムとして「Rising Scientist Lectures」を開催し、今回は「Frontiers in Craniofacial Pathology」をテーマに据えております。加えて、GC 学術奨励賞、Morita Student Award、Lotte 学術賞など、多彩な賞をご用意しております。学生、大学院生、若手研究者の皆さまには、ぜひ奮ってご応募いただき、日ごろの研究成果を存分にアピールし、互いに切磋琢磨していただければ幸いです。若手研究者が国内外の専門家と交流し、将来の研究発展につながる貴重な機会となることを期待しております。

さらに、2029年に国際歯科研究学会 (IADR) が日本で開催されることと決定し、我が国の歯科医学研究にとって大きな節目を迎えようとしています。本大会をその流れの中での第一歩と位置づけ、国内外のネットワークを一層強化し、JADR の活動がさらに活性化するきっかけにしたいと考えております。本大会が、研究者・臨床家・学生の皆さまにとって、新たな発見や協働が生まれる温かい場となりましたら大変嬉しく思います。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

学術大会ホームページ：<https://jadr74.jp/>



VI. レポーター募集 (2026年 IADR, San Diego, C.A., U.S.A.)

本年3月25日から28日にかけて、アメリカ、サンディエゴにて開催された第104回 IADR 総会・学会大会のレポーターを募集します。つきましては、JADR 会員の先生方から IADR 大会の様子など10月発行予定の JADR Newsletter 第2号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加された方からも大歓迎です。

字数：1200字程度 締切：6月30日(火)

執筆内容：IADR San Diego 大会に各自が参加した分野の報告。シンポジウム、ポスター、口頭発表、受賞などから自由に記載(過去のニュースレター参照)

原稿送付方法：MS WORDで、E-mailにて事務局へ送付

VII. IADR Hatton Award 応募候補者 (2027年度 IADR, Melbourne, Australia., 105th General Session & Exhibition of the IADR) の募集

2027年度の Hatton Awards 応募候補者を募集します。応募ご希望の方は5月以降に Website に掲載します応募要領をご覧の上ご応募下さい。

本賞は第10代 IADR 会長 Edward Hatton 博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior 部門、Senior- Basic Science 部門、Senior-Clinical Research 部門の3部門です。各 Division から推薦を受けた候補者は IADR 学会大会の前日に行われる Hatton Awards 本選にて審査を受け、各部門上位2名が順位付けで受賞者に選ばれます。

なお、各部門への応募資格と研究内容の区分は、以下のようになります。

Junior 部門：

歯学部学生による研究発表です。歯学部在籍中に行った研究が対象となります。基礎研究、臨床研究を問いません。

Senior 部門：

大学院在籍者、研究生、専攻生等による研究発表です。博士号既得者の場合、本選時に博士号取得後3年以内であ

れば応募できます。

Senior 部門は、下記2つの分野に分かれます。

- ・ Basic Science Research: Involving laboratory or animal research
- ・ Clinical/Pre-clinical Research : Involving research on human subjects and/or epidemiologic studies

VIII. IADR/APR 2029 横浜大会の実行委員会が始動しました！

IADR2029 横浜大会 実行委員長 江草 宏
(東北大学大学院歯学研究科
分子・再生歯科補綴学分野)

2029年 IADR/APR 横浜大会に向け、このたび実行委員会のキックオフミーティングが、2026年1月28日に東京科学大学歯学部にて開催されました。

本委員会は、委員長を江草 (JADR 副会長)、副委員長を松本卓也先生 (会計理事) が務め、林美加子会長、森山啓司前会長をはじめ、理事・監事、日本歯科医師会、日本歯科医学会、ならびに協賛企業の代表者により構成されています。さらに、アドバイザーとして今里聡 IADR 前会長、黒田敬之 IADR 元会長、高橋信博元 APR Regional Board Member にご参画いただき、オブザーバーとして横浜市観光協会、パシフィック横浜、日本政府観光局の皆様にもご参加いただいております。

100年以上の歴史を有する IADR において、日本開催は3度目となる本大会は、日本の歯科界が一体となり、そのプレゼンスを世界に示すまたとない機会です。実行委員会一同、力を合わせて大会の成功に向けて取り組んでまいります。

JADR 会員の皆様におかれましても、引き続きご支援・ご協力を賜りますよう、何卒よろしくご願ひ申し上げます。

【開催概要】

107th General Session & Exhibition of the IADR / 8th Annual Meeting of the IADR Asia/Pacific Region

会 期：2029年6月27日(水)～6月30日(土)

開 催 地：パシフィック横浜

(神奈川県横浜市みなとみらい1丁目)



IADR

INTERNATIONAL ASSOCIATION
FOR DENTAL, ORAL, AND
CRANIOFACIAL RESEARCH

CONTENTS

I. 巻頭言 林 美加子 (JADR 会長)	1	I. A Message for the New Year 2026 Prof. Mikako Hayashi: JADR President	1
II. IADR 会長を退任して 今里 聡 (IADR 前会長)	2	II. Experience as President of JADR Prof. Satoshi Imazato: IADR Immediate Past President	2
III. 第 6 回 IADR APR 学術大会 (第 73 回 JADR 総会・学術大会各賞受賞者報告)		III. Reports of the 73th JADR General Session/ The 6th IADR-APR general session	
1. JADR/GC 学術奨励賞を受賞して 安保 沙羅	4	1. 2025 JADR/GC Young Investigator Award Dr. Sara Ambo: Tohoku University	4
2. 権藤 理夢	5	2. Dr. Tadamu Gondo: Institute of Science Tokyo	5
3. JUMANA ZAVERI	5	3. Dr. Jumana Zaveri: Osaka University	5
4. 都留 千晶	6	4. Dr. Tsuru Chiaki: Hiroshima University	6
5. 松岡 大貴	7	5. Dr. Daiki Matsuoka: Okayama University	7
IV. JADR/Lotte Award を受賞して		IV. 2025 JADR/Lotte Award	
1. 仲 周平	7	1. Dr. Shuhei Naka: Okayama University	7
2. 新部 邦透	8	2. Dr. Kunimichi Niibe: Tohoku University	8
3. 前菌 葉月	8	3. Dr. Hazuki Maezono: Osaka University	8
V. 第 74 回 JADR 総会・学術大会開催のご案内 加藤 隆史 (大阪大学)	9	V. Announcement of the 74th JADR Annual Meeting Prof. Takafumi Kato: Chair of the 74th JADR Annual Meeting	9
VI. 第 104 回 IADR 学術大会 (2026 年、San Diego, C.A., U.S.A.) のレポーター募集 事務局	10	VI. Call for Reports of the 104th IADR General Session (San Diego, C.A., U.S.A.)	10
VII. Hatton Award 2027 国内候補者 (第 105 回 IADR, Melborne, Australia) 公募募集 事務局	10	VII. Call for the Hatton Awards Competitors of the 105th IADR General Session in Melborne, Australia from JADR	10
VIII. IADR/APR 2029 横浜大会の実行委員会が始動しました!	11	VIII. Kickoff of the Local Organizing Committee for IADR/APR 2029 Yokohama!	11

●編集後記●

San Diego 大会に参加された皆様、お疲れさまでした。本大会では、IADR 会長として卓越したリーダーシップを発揮された今里聡先生が IADR 執行部としてのご任務を終えられました。英語を母国語としない日本人研究者がこのような大きな国際舞台で活躍される姿に、深い感銘とともに大きな希望を抱いた方も多かったのではないのでしょうか。また、馬場一美先生ならびに小川祐司先生が Distinguished Award を受賞され、開会式でご紹介される姿は、JADR 会員として大変誇らしいものでした。心よりお祝い申し上げます。次回大会はメルボルンで開催され、JADR が所属する Asia Pacific Region との共催となります。多くの皆様にご参加いただき、本大会を盛り上げるとともに、2029 年の IADR 横浜大会の成功へとつなげていきたいところです。さらに、本年度の JADR 総会は 11 月に大阪で開催されます。IADR 会長ならびに KADR 会長をお迎えし、横浜大会に向けた機運が一層高まることが期待されます。大阪で皆様とお会いできることを楽しみにしております。

編集担当 江草 宏 (東北大学)

発行：国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <https://jadr.umin.jp>
 連絡先：
 国際歯科研究学会日本部会 (JADR)
 副会長 江草 宏 (東北大学大学院歯学研究科 分子・再生歯科補綴学分野)
 〒612-8082 京都市伏見区両替町 2-348-302
 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773
 2026 年 4 月 30 日 発行